

写真右から、
商業科・「地域人教育」担当 國松秋穂先生
電気電子工学科主任 栄 隆志先生
建築学科主任・進路指導 清水 潔先生。

生徒が「自己開示」に踏み出す地域交流で 市や大学と共に「自治の力」を発揮できる力を伸ばす 「地域人教育」

この地域で学んだ矜持を胸に
軸をもって未来を創造する人に

長野県飯田市は、人口減少の課題を抱えている。高校卒業後に多くの若者が外に出て、大半が戻ってこないのが一因だ。それだけに、同市にある飯田OIDE長姫高校は、この地域を担う人材の育成を期待されている。

同校は、飯田市にあった2つの高校が統合し、2013年に開校した総合技術高校だ。機械・電気・電子系の4学科と、建設系の2学科、および商業科からなる。このうちの商業科は統合前の2012年度より、地域協働の学びで「地域を愛し、理解して、地域に貢献する人材を育成する」という「地域人教育」を開始、継続している。

取組には疑義を挟む声もあった。「愛郷心の育成は生徒を地域に縛ることにならないか」と。地元の期待には応えたいが、その協働は本当に生徒のためになるのか。学校は「生徒にどうなってほしくて」地域と連携するのかが。

この点について先生たちは、当初から

一つの方向性をもっていった。現在、取組を中心になって進めている國松秋穂先生は、その方針をこのように語る。

「愛郷心に通じるような想い、この地域で過ごしたことへの『矜持』や『誇り』をもてるようにすることです。この地域で過ごして、自分はこういうことに面白さや課題を感じた、こんな生き方をしたいと思った、という想いを育む。言ってみれば、自分はこういう人間だというアイデンティティの確立です」

なぜ矜持をもつことが大事で、どうしてそこに地域が関係するのか。

「社会が複雑化し、答えのない課題と向き合わねばならない今は、自分で考えて行動し、多様な人と協働して暮らしを創造するような『自治の力』が求められています。そのように自主的に動くには、土台として、自分はこうしたい、といった矜持となるような想いをもつことが必要です。その軸となる想いを、学校の教員だけで、教科書に載っている、一般化された内容だけで、生徒に育むのは難しい。だから地域で、本物にふれてほしいのです。企業や大学

で活躍する人から、買ひ物がしんどくなつたお年寄りまで、立場も世代も異なる多様な人間と関わり、その人たちの想いにしっかりとふれ、生徒も自分の想いを吐き出すなかで、社会にある魅力や課題に気づき、自分にできることや自分のやりたいことも発見する。そうした学びを実現させられることに、地域協働の意味があると思うのです」

（國松先生）

地域と関わり、興味のある課題ややりたいことを見つけた生徒は、強制せずともその自分のテーマに向かい出す。するとその過程で、やりたいことを成すには主体的に動くなど「人間性」を磨くことや、知識や思考力など「学力」を高めることも必要だと感じていく。また、自分の取組が地元のみならず、日本や世界の課題ともつながることに気づく生徒も出てくるという。

「地域人教育で私たちが目指しているゴールは、この地域を支える力にもなれば、世界中で活躍できる力にもなるような『自治の力』を生徒に育むことなんです」（國松先生）

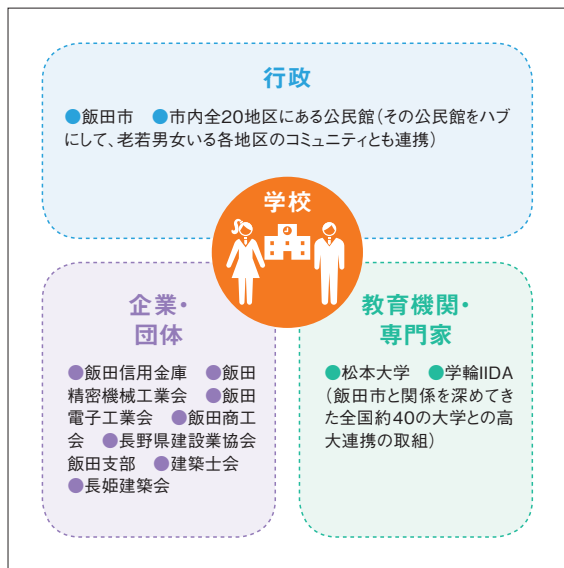
地域連携によるカリキュラムの概要

科目	学習内容
1 学年 【基礎】 地域人教育 (学校設定2単位・70h)	*講義・演習 ●地域(暮らす・働く・学ぶ)を知る講座、レポート作成法 ●フィールドスタディ[松本市、飯田市、東京都](調査→整理・分析→報告)
2 学年 【応用】 地域人教育 (学校設定2単位・70h)	*地域でのイベントの運営サポート ●「りんご並木まちづくりネットワーク」に参加 ●年間6回程度、地域イベントの運営サポート ●インターンシップを連携企業で実施、探究のための基礎講座
3 学年 【実践】 課題研究 (3単位・105h) 毎週金曜日4～6時間目	*地域づくり・課題解決への取組 ●10グループに分かれ、1年かけて「地域商品開発・販売」「イベント企画・運営」「地域課題」などに取り組む(プロセスは、事前学習→現地調査→課題設定→企画準備→実践活動→振り返り→修正・発展→まとめ・成果発表)

取材・文／松井大助



地域社会と協力し、生徒を育てる体制 /



3年生の課題研究では、商品開発やイベント企画、お店運営やワークショップ開催など、地域のためにできることを生徒が調査、企画、準備、実行し、その過程で多様な人とも関わっていく。

内発的動機で取り組む生徒を地域の人に受け止めてもらう

「地域人教育」は「できる範囲から小さく始めたのが良かった」と國松先生は語る。原点は、商業科のある教員が、担当クラスの3年生の課題研究で、本

物体験をさせようと、買い物に行きづらい住民向けのリヤカー販売を始めたこと。活動に共鳴する教員が増え、商業科全体に広がった。そこから地域連携の研究で親交のあった松本大学にも相談し、同大学と飯田市と協定を締結。地域行事への参加など活動の幅を広げ、2012年度より「地域人教育」と銘打つ。翌年度には1、2年生の授業に学校設定科目を設置、全学年の取組となった(前ページの図参照)。

一連の活動で大事にしているのは、生徒が「自己開示」しながら地域の人と関わるようにすることだ。

「生徒が取り繕わずに自由に考えられるようにしたいのです。何を調べるか、教員が誘導しない。昨年好評の生徒の活動があっても、今年もやるべきと固定化しない。まずは地域の多様な想いにつれ、生徒が感じたことを素直に出せるようにする。その自分の想いをもって地域と関わり、認められたり揉まれたりして成長する。体裁よく活動が進むことより、交流による成長を大事にしています」(國松先生)

2016年度からは、入学希望者に向けて商業科の募集の観点として「地域における学習を通じ、まちづくりに興味関心をもち、多くの人と地域課題について探究的に取り組もうとする者」と明示。これを機に、生徒や保護者の理解も深まった。「地域人教育」の活動をしたくて入学する生徒も増え、全体の入学希望者も増加した。

就職・進学して「何をしたいか」自分の想いをもつ生徒が増えた

進路実績では、以前より地元の就職率が高かったこともあり、数量的な変化はあまりない。だが先生たちは「質的な変化」を感じているという。

「就職でも進学でも『何のためにそこに進みたいのか』を語れる生徒が増えたのです。もちろん想いがまとまらない生徒もいますが、10年後や20年後に『高校のあの経験があったから、こうしたいのかも』との想いが芽生えるようなそんな種まきを続けたいと思うようになりました」(國松先生)

2019年度からは、「地域人教育」のような取組を、他の科でも推し進めるべく、「地域協創スペシャリスト」育成プログラムの構想がスタート。機械・電気・電子系、建設系、商業系の学科がそれぞれに、地元企業や市や大学と、共同事業体となるコンソーシアムを立ち上げた(関係団体は上の図参照)。

来年度にまずできる範囲から始め、再来年度より本格実施となる予定だ。

「コンソーシアムで一緒にしているのは、これまでも課題研究や講演で協力いただいていた方々です。生徒には地域の人の関わりを通して、プロの視点や、みんなで話し合いながら問題を解決することを学んでほしいと思っています」(建築学科・清水 潔先生)

「地域の人は、例えば製造業の方なら些細なエラーでも、お客さまになぜ起

生徒's EYE

地域を担う人の魅力に気づき自分でもできることも発見した

●地域人教育では飯田の良さを再確認できたと思います。地域は結局、人でできていると思いました。温泉やイベントが一番の目玉というより、そこにいる人が良くて、その人に惹かれてまた人が集まっていたからです。

大学生と一緒にやった観光の研究では、会った人の似顔絵を入れた地図を作ったら好評で、自分なりにチームに貢献できたという自信にもなりました。地元の野菜を使った商品開発もして、メンバーや地域の人と進めるなかで、目標に向かつてみんなで協力する力や、コミュニケーション能力も高められたと思います。物事を1方向から見るのではなく、いろいろな立場から眺めてみることも学びました。好きな地域の人と今後も関わりたいので、地元のJAに就職します。今までの活動のように、みんな課題を見つけて、どうするか話し合っ解決を目指すような仕事ができたらと思っています。



商業科3年 菅沼望子さん

きたか説明するために原因を追究する」など、学校生活にない視点をもたらしてくれそうです。いろいろな考え方にふれて、何よりも生徒の「生きざま」が変わるとよいなと思っています」(電気電子工学科・栄隆志先生)